

[研究ノート]

万葉集の理科学的考察(Ⅳ)

——あが子飛ばしつ——

藤 田 秀

- 〈目 次〉 §IV-1 はじめに
§IV-2 あが子飛ばしつ
§IV-3 大宰府都府楼跡
§IV-4 老男はかくのみならし
§IV-5 語りつぐべき名は立てずして

§IV-1 はじめに

昔は、誰にでも判っていたことが、最近をよく判らなくなった、ということがある。そんなことの一つに、「子供に先立たれた親の気持」というものがある。乳幼児の死亡率が劇的に下がったために、「子供に先立たれた」ということが、ほとんどなくなった。勿論、兵隊に取られて戦死した、などということもない。これは大変に喜ばしいことである。しかしながら、そういう一般の風潮に乗って、「文学者」までが、子供に先立たれた親の気持が判らぬとあつては、由々しい問題と言うべきであろう。

私事で恐縮であるが、筆者の子供達は、幸いに皆健在である。しかしながら、筆者の妹が一人、乳幼児で死んだ。筆者が3歳の1月20日に生まれ、9月8日にはもう死んでしまった。筆者には、この妹の記憶が何もない。しかるに母は——その母ももう死んでしまったが——67歳で死ぬまで、この子の死を悲しんでいた。毎年9月になり、中秋の名月が近づくと、一人で濡れ縁に出て、月を眺めて泣くのである。あの子が死んだ時も、こんなお月さんだった。白玉のように色の白い子で、一番可愛かった。パラソルをさして散歩にゆき、途中でパラソルを逆さにして道端に置き、その中にあの子を入れて、オシメをとりかえた。2人目の妹が生まれた時も、パラソルに入れてオシメをとりかえていると、お前が、「前ニコウイウノガ居タ」と言って、親を泣かせた。芝居はいやだ。気散じに、新宿のムーラン・ルージュに行くと、女の人が赤ん坊を背負って舞台に出て来た。それを見ると、また泣けてしまう。こう言って、35年も昔のことを、昨日のことにように嘆くのである。こう言ったからといって、母は何も特別感受性の強い人ではない。平々凡々たる、市井の主婦であった。

思わず前置きが長くなったが、今回は、こういう「親の気持」について語りたい。

§IV-2 あが子飛ばしつ

万葉集第 904 首に、山上憶良の歌がある。それはこういうのである。

オノコ フルヒ
男子名は古日に恋うる歌三首

ヨノヒトノ トウトビネガウ ナナクサノ タカラヲモ ワレハナニセム ワガナカノ ウマレイデタル シラタマノ
 世人之 貴慕 七種之 宝毛 我波何為 和我中能 産礼出有 白玉之
 アガコフルヒ ハ アカボシノ アクルアシタハ シキタ エノ トコノヘサラズ タテレドモ
 吾子古日者 明星之 開朝者 敷多倍乃 登許能辺佐良受 立礼杼毛
 タレドモ ヌウワブレ ユウツツノ ユウベニナレバ イザネヨト
 居礼杼毛 登母尔戯礼 夕星乃 由布弊尔奈礼婆 伊射称余登
 テヲタズサワリ チチハハモ ウエハナサガリ サクサノ ナニヲネント ウツクシク
 手乎多豆佐波里 父母毛 表者奈佐我利 三枝之 中尔乎称牟登 愛久
 シガカタラエバ イツシカモ ヒトトナリイデテ アシケクモ
 志我可多良倍婆 何時可毛 比等々奈理伊豆天 安志家口毛
 ヨケクモ シント オオフネノ オモイタノムニ オモワヌニ ヨコシマカゼノ
 与家久母見武登 大船乃 於毛比多能無尔 於毛波奴尔 横 風乃
 オイケラレバ セムスベノ タドキラシラニ
 尔母布敷 可尔布敷可尔 覆来礼婆 世武須便乃 多杼伎乎之良尔
 シロクエノ タスキラカケ マソカガミ テニトリモチテ アマツカミ
 志路多倍乃 多須吉乎可気 麻蘇鏡 弓尔登利毛知弓 天神
 アホギコイノミ クニツカミ フシテヌカヅキ カカラズモ カカリモ カミノ マニマニト
 阿布藝許比乃美 地祇 布之弓額拜 可加良受毛 可賀利毛 神乃未尔麻尔等
 タチアザリ アレコイノメド シマシクモ ヨケクハナシニ ヤクヤクニ
 立阿射里 我例乞能米登 須與毛 余家久波奈之尔 漸々
 カタチツクホリ アサナアサナ イフコトヤミ タマキワル イノチタクエヌレ タチオドリ
 可多知都久保里 朝々 伊布許等夜美 靈剋 伊乃知多延奴礼 立乎杼利
 アスリサケビ フシアオギ ムネウチナグキ テニモテル アガコトバシツ
 足須里佐家婢 伏仰 武祢宗知奈気吉 手尔持流 安我古登婆之都
 ヨノオカノミチ
 世間之道

これでは判り難いと思われるので、現代文に書き直されたものを示すと、こうである。

世の人の 貴び願う 七種の 宝をも 我はなにせむ
 我が中の 生まれ出でたる 白玉の 吾が子古日は
 明星の 明るる朝は 敷栲の 床の辺さらず
 立てれども 居れども 共に戯れ
 夕星の 夕になれば
 いざ寝よと 手を携わり

父母も うえはなさがり
 三枝の 中にを寝んと 愛しく しが語らえば
 何時しかも 人と成り出でて
 悪しけくも 良けくも見んと 大船の 思い頼むに
 思わぬに 横 風の
 尔母布敷 可尔布敷可尔 覆い来たれば
 せむすべの たどきを知らに
 白栲の 櫂を掛け まそ鏡 手に取り持ちて
 天つ神 仰ぎ乞い祈み
 国つ神 伏して額づき
 かからずも かかりも 神のまにまにと 立ちあざり 我乞い祈めど
 しましくも 良けくは無しに 漸々に 形つくおり
 朝な朝な 言う言止み
 たまきわる 命絶えぬれ
 立ちおどり 足すり叫び
 伏し仰ぎ 胸打ち嘆き 手に持てる 我が子飛ばしつ
 世間の道

これが、「子供に先立たれた親の気持」というものである。「我が中の生まれ出でたる、白玉の吾が子古日は」、あの子は、白玉のように色の白い子だった。「愛しく、しが語らえば」。あの子は、一番可愛い子だった。いつの世も、親の言うことは同じである。「朝な朝な言う言やみ、たまきわる、命絶えぬれ」。筆者の父も、死ぬ3週間前には、もう声が出なかった。声を出すということは、普段思っている以上に、大変エネルギーをつかうものであるらしい。何と正確な表現であるか。

しかるにどうか。「文学者」と称しながら、いかに愚かなことを言う人がいるか。筆者がこれ迄に出会った中で、一番乱暴な意見から御紹介しよう。それは、最後の一句、「我が子飛ばしつ」である。これを、「死んだ子を放り出した」と言うのである。何たる出鱈目。死んだ自分の子を、放り出せるものかどうか、少

し考えてみれば判るであろう。もう少しマシなものでも、こんなことを言う。「世間の理法の前には一切の所有が風に吹き飛ばされる浮塵のようなものだという表現」。憶良はそんな理屈は言わない。「ああ、あの子を飛ばしてしまった」と言うのみである。これを、やれ「飛魂」だの、「^{ヒヨウジン}飄塵」だの、「^{ヨコシマカゼ}横風の縁」だのと、実にくだらない。

「万葉人」にとって、「死」とは、魂が鳥にうつることなのである。「人は死ねば、魂は鳥にうつって飛んでいく」。万葉人なら、誰でも知っていたこんな簡単なことを、最近の「文学者」は了解していないのである。万葉集の中に、このことを立証するのは、極めてたやすいことである。「鳥」が出て来たら、いつもそのつもりで、警戒する必要がある。

例えば、第6巻第924首にこんな歌がある。

み吉野の ^{キヤマ}象山の ^マ際の ^{コノエ}木末には こだもさわぐ 鳥の声かも

これは単に、沢山の鳥が啼いている、という歌ではない。この歌の前に長歌があり、その一節に、「ももしきの 大宮人は 常に通わむ」とある。つまり、昔の大宮人の靈魂を受けているのである。まだまだ、いくらでもある。例えば、第3巻第416首にはこうある。

^{オオツノミコ}大津皇子 ^{タマフ}死を被りし時に ^{イワレ}磐余の池の ^{ツツミ}堤にて涙を流して作らす歌

^{モモツグ}百伝う ^{イワレ}磐余の池に 鳴く鴨を 今日のみ見てや 雲隠りなむ

今は死なねばならないという大津皇子が、何故鴨を見て涙するのか。ああ自分も、今日限りで鳥になるんだ、ということが判らねば、この歌は鑑賞できない。

まだある。第3巻第338首以下に、大伴^{タビト}旅人の作った、「酒を^ホ讀むる歌13首」というのがある。その第348首には、もっとはっきりとこうある。

この世にし 楽しくあらば 来む世には 虫にも鳥にも我はなりなむ

解説は不要であろう。三たび私事で恐縮であるが、筆者の家の庭に野鳥の餌台がある。こんなにみずほらしい餌台でも、冬になると、野鳥がたくさん来る。初めのうちは、シジウカラ、メジロ、などが可愛いと思った。それが、やがていつ頃からか、雀が一番可愛いと思うようになった。雀はいつも、群れをなしてやって来る。そして餌台に乗ると、身を寄せあって食事をする。とてもにぎやかだ。「^{エンジャク}燕雀いずくんぞ知らん、^{コウコク ココロザシ}鴻鶴の志」などと言って、さげすまれながらも、人が訪れなくなると、「^{ジャクヲ}門前雀羅を張る」などと言って、淋しがられる。鳥になるなら、雀になるのが一番いい。

「文学者」と称して、もっとくだらぬことを言う人がある。「古日は憶良の子ではなく、この歌は愛子を失ったある親の身になって歌った代作歌である」などと言う。それもくだらない話であるが、代作ではないと主張する人も、実につまらないことを言う。まず、この歌を作った時に、憶良は70歳を超えていたと言う。それはそうかもしれぬ。しかし、「憶良が70歳を過ぎていても女性が受胎相当年齢にあれば子をなすことは可能」であるなどと言う。全くあきれ返る。筆者の母は、32歳の時に亡くした子のことを、67歳になっても、泣いて悲しんでいた。憶良ほどの詩人が、70歳を過ぎていても、この悲しみを昨日のこのように歌えない筈はないのである。歌が、「憶良自身の不幸による哀働の作である」と反論するために、70歳の老人に、あえて年不相応な若い細君や、幼児を持たせてやる必要などないのである。

§IV-3 大宰府都府楼跡

初めて都府楼跡へ行った時には、瓦が地上に散乱していた。博多湾の、能古島を望む海浜で、一人ぼっちで鷗を眺めて1日過ごした。鷗が飛ぶのを見ていると、いろいろな形に見える。あるときは翼をたたみ、「白」という字に見え、あるときは翼を広げて、「水」という字にも見えた。万葉集のいう「白水郎」というのは、「アマ」のことではなく、「鷗」のことではあるまいか、などと1人で勝手にあれこれと考えて、時を過ごした。次の日、思い立って、都府楼跡へ行ってみた。10人程の女の人が、手拭いで顔を覆って、しゃがみ込んで、カチャカ

チャと瓦を掘り返していた。有名な、布目瓦^{ヌノメガワラ}の破片である。無数に散乱する破片の上を歩いていると、どうしても一つ欲しくなった。女の人達の他は、誰もいない。一つ下さい、などと申し出たら、いけませんと言われるに決まっている。そこで、これぞと思う破片の上に、まずショルダーバッグを置いた。続いて、しゃがみ込んで、バッグの中からカメラを取り出した。2、3枚景色を写してから、再びしゃがみ込んで、カメラをバッグに納めた。この時手早く、バッグの下の破片を掴むと、これをカメラと一緒にバッグに入れた。女の人達は、ペチャクチャと話をしながら、小さなシャベルで瓦を掘り返している。誰もあやしんだ人はいない。奥の方の礎石群を眺めて、その場を離れた。

2度目に行った時は、T大B研究所のK教授と一緒にだった。宿舎のホテルで朝食をとっていると、K教授がやって来た。今日1日暇が出来たから、どこかへ行かないかと言う。ではと言って、都府楼跡はどうかと言うと、行こうと言った。ホテルを出た時から、K教授はしゃべり出した。外国人の友達の話から始まった。近頃はどうしているだろう、彼もなかなか大変だろうと話した。続いて、B研究所の将来計画。電車に乗ってもしゃべり、駅を降りてもしゃべり、歩き出してもしゃべっていた。K教授は、この4月1日付でT大を定年退官になったのである。まだ1週間とたっていない。積年の思いを、一挙に吐き出すといった感があった。

都府楼跡についてみると、驚いたことに、すっかり整備されていた。かつて瓦の散乱していたあたりは、きれいなコンクリートの枠が出来ていて、黒い玉石が敷きつめてあった。見渡すと、都府楼の規模がよく判る。しかしながら、昔の瓦の上を踏んで歩くという、時間の連続性は失なわれていた。

憶良は、67歳の頃、神亀3年(726年)丙寅の年、九州筑前の国守に任命されたという。筑前にはこの大宰府があり、その長官には、大伴旅人^{ウヂト}がなった。旅人というのは、有名な万葉歌人である。したがってこの2人の間には、交遊があったと見るべきであろう。前述したように、この時に憶良は、年不相応な若い細君と幼い子供をつれて、筑前に下向したなどと言われているのである。

奥の方の礎石群は、昔のままであった。芝生の中に、円形の礎石が転がっている。直径1メートル、厚さ50センチもあろうかというような、大きな礎石が、

千年の重みに耐えかねて、不等沈下を起こしている。あるものは傾き、あるものは横転しかかり、無造作に半分土に埋まっている。今、「不等沈下」と言ったが、筆者は、これは盗掘のためではないかと思っている。誰かが、礎石を掘り起こして持ち去ろうとした。それが横転して、失敗したのではないかと思われるのである。憶良も、この礎石のへりを踏んだかも知れぬと思って、靴の先で軽く蹴ってみた。目を上げると、背後には山城が見え、前には山の陵線が見えた。この陵線は、憶良が眺めたものと変わるまいと思って、とくと眺めた。

歩き出すと、またK教授がしゃべり出した。B研究所の施設が、いかにオンボロであるか。そのため、いつダウンしても不思議はない。次のレールは、自分に出来るだけのことはして来たと言った。皆さん、オンボロを承知でやったんでしょ。それで、得意になっている人だっているじゃありませんか、と答えた。

憶良は、67歳で九州筑前の国守になると、歌を詠み出した。勿論、若い頃の歌と思われるものもあるが、あまり立派な出来映えとは思えない。しかしながら、このシリーズ(I)の中でも述べたように、「類聚歌林」という著作がある。全7巻とも言われている。これは、残念ながら、今日には伝わっていない。しかし、万葉集の編集には、大いに参考にされたと言われている。万葉集中にも引用されている。67歳頃から74歳で死ぬまでの、僅か7年間の歌が光っているのである。

§IV-4 ^{オヨシオ}老男はかくのみならずし

^{ヤマノウエノオクラ}山上憶良は、万葉人としては珍しく、年齢と年号の判る人である。晩年の作に、「^{チンア ジアイン}沈痾自哀文」というのがある。これは、晩年になって、病気になったことを嘆く、漢文である。この中に、「是の時年七十有四、^{ヒシバツシラ}鬢髮斑白けて、筋力やせおとろう」とある。そして作品の左註に、「天平五年六月丙申朔三日戊戌作」とある。つまり、天平5年(733年)癸酉の年に74歳とすると、これから逆算して、斉明6年(660年)庚申の生まれ、つまり^{サル}申年ということになる。これは勿論、「満年齢」ではなく、「数え年」である。万葉時代に、「ゼロ」という数字のないところか

ら、年齢も数え年であったと考えられるからである。

憶良の生まれたのは、このシリーズ(Ⅲ)の、有間皇子アリマノミコの刑死から2年目、藤原不比等フヒトの生まれた翌年ということになる。後に、権勢並ぶ者なき地位に昇った不比等とは、僅かに1歳違いであった。憶良は、この朝日の昇るような殿上人を、どのような思いで眺めていたであろうか。しかも不比等は、憶良が61歳の、養老4年(720年)庚申の年8月3日に、62歳で先に死んだ。まるで運命にあやつられるように、この年4月21日に日本書紀の完成を見て、死んだのである。とも言えるが、実は筆者はこう思っている。それは、日本書紀の編集に大きくかかわった、不比等の命が危いので、ここで一応完成ということにしたのではないか。さもないと、記述が持続11年で終わる理由が、見当たらないように思えるのである。

憶良の幼年時代は、前記(Ⅲ)の、「激動の28年間」の真最中にあった。まず、生年の斉明6年(660年)庚申の年が、百濟滅亡の年である。この辺を考慮してか、憶良は百濟からの渡来人の子であった、という説もある。父は、憶仁オクニという医師であったともいうが、勿論はつきりとは判らない。後年の憶良の学才を見れば、彼が渡来人の子供であったとする説にも、一理あるように思える。

憶良4歳の年、天智称制2年(663年)癸亥の年8月、大和の軍勢は、朝鮮半島ハラスキノエの白村江で、大敗を喫した。唐と新羅の水軍の、敵ではなかったのである。9月には朝鮮半島から撤兵し、翌年1月には、中大兄皇子は九州から飛鳥へと逃げ帰って来た。大和朝廷が、唐と新羅の進攻の幻影におびえる日々が始まった。これら不安な5歳の日々を、憶良はどこで、どのように思って過ごしたのだろうか。一切記録はない。

明けて憶良6歳の時、天智称制4年(665年)乙丑の年、中大兄皇子は遣唐使を出した。必死の外交政策というべきであろう。それでも安心出来なかった彼は、2年後の天智称制6年(667年)丁卯の年3月、近江の大津に遷都した。世情は非常に騒然となったに違いない。この時、憶良は8歳になっていた。もう世情のことが判っていい年頃である。翌年(668年)戊辰の年、中大兄皇子は遂に大津で即位して、天智天皇となった。しかし、朝鮮半島での激動は続き、高句麗が亡んだ。その後、幸いに唐と新羅の進攻はなく、近江朝は内政に励むことが出来

た。そして、憶良 12 歳の、天智 4 年(671 年)辛未の年 12 月 3 日、天智天皇は大津で亡くなった。46 歳であった。

翌、憶良 13 歳の年、天武元年(或いは弘文元年)(672 年)壬申の年を、文化史的には白鳳元年と呼ぶ。白鳳という年号はないが、以後天平元年(729 年)己巳の年、憶良 70 歳までの 58 年間を、白鳳時代という。このように、憶良は、白鳳から天平の初めにかけて生きて来た人である。

この、憶良 13 歳の時、天下を 2 分した壬申の乱^{ジンシン}が起きた。天智天皇の次の皇位継承をめぐる、実子大友皇子方の近江朝側と、実弟大海人皇子^{オホアマ}方の吉野側との間で、叔父・甥の内戦となったのである。7 月 6 日、大和の上津道^{カミツミチ}と中津道^{ナカツミチ}とで激戦があった。戦の決着はなかなかつかず、終日激戦が続いたという。憶良はこの時どこに居たのであろう。もし大和に居たならば、戦の雄叫びが聞こえていたであろう。彼は近江方に味方していたのか、吉野方を利としていたのか、一切判らない。

白鳳時代は、平和な時代であった。勿論、内政は多難であったが、外患はなかった。壬申の乱に勝利を収めた大海人皇子が、即位して天武天皇となった。都も近江の大津から、大和へと戻った。天智天皇の、急激な朝廷権力強化策が改められ、大和の豪族達の、保守主義に振り子が戻ったとも言われている。憶良 21 歳の年、天武 9 年(680 年)庚辰の年、皇后(後の持統天皇)が病氣となり、天武天皇は皇后の病気の治癒を祈って、薬師寺の着工を命じた。薬師寺は、着工は判っているが、いつ完成したのかは不明である。明けて、憶良 22 歳の、天武 10 年(681 年)辛巳の年、歴史編述が始まった。これは 720 年まで、実に 40 年かけて続けられるのである。この間に、皇后の子草壁皇子の立太子が、皇子 20 歳の時にあり、続いて、皇后の姉大田皇女と天武天皇との間の子、大津皇子も、2 年遅れて朝政に参加した。

憶良 26 歳の年、天武 14 年(685 年)乙酉の年 9 月、今度は天武天皇が病氣となった。明るる年、天武 15 年(或いは朱雀元年^{アケミドリ}、686 年)丙戌の年 9 月 9 日、天武天皇は亡くなった。すると、早くも 10 月 3 日には、持統天皇は口実を構えて、実子草壁皇子のライバルである、姉の子大津皇子を、24 歳の若さで刑死させた。大津皇子の後、山辺皇女は、裸足で柩を追って殉死したという。これは、有間

皇子の事件とよく似たいきさつを持っている。この政治的変動の瞬間を、27歳の憶良は、どこで何をして見つめていたであろうか。憶良28歳の年に、持統天皇は即位して、持統元年となった。持統天皇は、翌持統2年(688年)戊子の年11月まで、延々2年間も天武天皇のものがりを続けた。だが、持統天皇の不幸は、一つではやって来なかった。翌持統3年(689年)己丑の年4月13日、大津皇子を刑死させてまでして、確保したかに見えた草壁皇子の天皇の地位は、あっけなく崩れた。草壁皇子が亡くなったのである。28歳だった。孫、^{カノミコ}軽皇子は、まだ7歳だった。宮廷歌人麻呂は、有名な草壁皇子の挽歌を歌ったが、30歳の憶良は沈黙を守った。

持統天皇の時代も、平和が続いた。藤原宮を作り、吉野へ行き伊勢へ行き、夫天武天皇と苦楽を共にした、壬申の乱をしのび過ごした。勿論、相次ぐ土木工事への世の批判はあったが、持統11年(697年)丁酉の年8月1日、持統天皇53歳の年に、無事孫軽皇子を即位させた。軽皇子は15歳で、文武天皇となった。憶良は38歳になっていた。日本書紀の記述は、この持統11年7月をもって終わっている。

文武天皇の大宝元年(701年)辛丑の年、31年振り(36年振りではないかと思うが)に、遣唐使が出されることになった。翌大宝2年(702年)壬寅の年、憶良は43歳で「遣唐少録」に選ばれた。これは書記の仕事とされている。語学力のある実務家の役であろう。この辺も、憶良渡来人説の一因となっている。遣唐の記録はない。大陸唐で何をし、何を見、何を思ったかも不明である。ただ、大唐との国力の差を、まざまざと感じたであろうことは想像がつく。2年後の慶雲元年(704年)甲辰の年、45歳で無事に帰国した。幸運な遣唐使と言える。国内では、不比等がますます勢力を得ていた。和銅元年(708年)戊申の年12月、憶良49歳の年、平城遷都が議されて、地鎮祭が行われた。また、「和銅開珍」が作られ、貨幣経済が強行されていた。長安の大都を見て来た眼には、これらの動きは、どのように映ったであろうか。ともあれ、3年後の和銅3年(710年)庚戌の年3月10日、都は平城京に遷都した。憶良は51歳であった。

和銅5年(712年)壬子の年正月28日、古事記が完成した。憶良53歳の時である。ついであるが、日本書紀には、古事記のことも万葉集のことも出て来ない。

日本書紀は、これらを完全に無視している。それは何故か、よく判らない。思うに一つの理由は、日本書紀の編者の頭に、自分達は、日本の正史を書いているんだという、誇りがあったためではあるまいか。自分達は、堂々たる漢文で書いている。しかるにどうか。古事記も万葉集も、漢字の「あて字書き」ではないか。あんなものは、著作とは言えない。そういう頭もあったのではあるまいか、と思われる。後述するように、万葉集巻5には、憶良の書いた漢文が載っている。万葉集に漢文が載るのは、極めて珍しい。証拠はないが、この頃憶良は、歌集「類聚歌林」を作ったのではないかと思われる。53歳という年齢は、その位のことをしてもいい年である。

靈龜2年(716年)丙辰の年、憶良は57歳で伯耆守に任命された。43歳の時に、無位で遣唐使に加わった憶良は、57歳で、有位の従五位下になるのである。明治時代は勿論のこと、今日でも、「外国留学」を出世の手段と心得る人がいるようだが、そういう意味では、憶良の昇進は、随分ゆっくりしたものだったと言える。一説には、この伯耆守の時代に、地方の貧困を見る機会があったのだろう、と言われている。このシリーズ(I)で紹介したように、後で作った「貧窮問答の歌」一首により、「青丹吉 寧楽乃京師者 咲花乃 薰 如今成有」と歌った万葉集は、一挙に、その光と影を変えることとなったのである。

前述したように、養老4年(720年)庚申の年4月21日に、日本書紀が出来上がった。そして同年8月3日には、権勢並ぶ者なき藤原不比等が、62歳で亡くなった。あまりに間が良すぎるので、これも前述したように、不比等の死に合わせて、日本書紀を完成させたのではないかとさえ思える。さもないと、持統11年(697年)丁酉の年7月で、日本書紀が終わる理由が見当たらないのである。確かに、持統11年8月1日には、軽皇子(草壁皇子の子供、持統天皇の孫)が、15歳で、待望の即位をしている。もし、持統天皇が日本書紀を作らせたのであったなら、ここで終わっても不思議はあるまい。しかし現実には、それから23年も後のことなのである。天皇にしても、持統、文武、元明、元正と4代もたっているのである。

翌、養老5年(721年)辛酉の年、憶良は62歳で、東宮侍講16人中の1人に選ばれる。これは、東宮つまり皇太子の家庭教師である。ここで言う東宮とは、

次の聖武天皇になる^{オビト}首皇子のことで、21歳であった。当時の勤務時間は、早朝から正午までだから、午後に侍講を務めた、ということになろう。憶良は、何を担当したのか不明である。一説には、弹琴唱歌の手ほどきではないかと言うが、これも不明である。しかしとにかく、「類聚歌林」は出来上がっていて、その業績で選ばれたのではないと思われる。憶良が、唱歌が上手かったのではないかという説は、あまりに唐突で俄かには信じ難い。むしろ、漢文の作文を担当したのではあるまいか、という方がのみ込み易くはないか。とにかく、彼の作詩能力、あるいは漢文の作文と読解力、あるいは歌の知識、これらの力量が買われたのであろう。ともあれ、首皇子が即位する迄の3年間に、一流の学者、知識人との交流が起こった筈である。この中に、後年の知友、大伴旅人もいたのであろう。神亀元年(724年)甲子の年、首皇子は即位して聖武天皇となった。侍講の職位も解かれたと思える。以後、天平5年(733年)癸酉の年、74歳で死ぬまでの9年間、まるで竹の花が咲いたように、憶良にとって創作に忙しい年が続いたのである。

神亀3年(726年)丙寅の年、憶良は67歳で筑前国守に任命される。今日でも、67歳と言えば老年と言えよう。万葉の当時にあつては、それがどのような高齢であったか、想像に難くない。それが、九州に行かねばならないのである。九州へはほとんど船旅であろうから、今思う程つらい旅ではなかったのかもしれないが、それでも大宰府へは、馬で行かねばなるまい。やはり、67歳の老人にはきつい旅であったろう。神亀4年、あるいは神亀5年(728年)戊辰の年、大伴旅人が大宰の帥、つまり大宰府長官として着任した。正三位中納言であったという。憶良と旅人とは、再会を喜ぶ暇もなく、旅人の妻が亡くなった。旅人は64歳だった。憶良は、友人が悲しみに沈む様を見て、これに触発されて、歌を詠み始めるのである。憶良にとっては、漢文を書き、歌を詠むことが、救いであつたのであろう。

万葉集巻5は、旅人の沈痛な漢文で始まる。

禍故重疊し、凶問累集す。^{ヒタフル}永に崩心の悲しびを懐き、^{ナミダ}独り断腸の泣を流す。
但し両君の大助に依りて、傾命をわずかにつぐのみ。筆は言を尽さず、古今

の歎く所。

神亀5年6月23日

これは、旅人の妻の死に重なって、大和から、親しい人の死を知らされて来たのだ、と解されている。旅人の文に応えて、憶良が漢文を書く：

けだし聞く、四生の起滅は夢の皆空しき方^{ホトク}、

から始まって、以下の様に続く、

何ぞ、偕老の要期^{ヨゾ}に違^{クガ}い、独飛して半路に生かんと図らん。蘭室に屏風いたずらに張り、断腸の哀しみいよいよ痛く、枕頭に明鏡空しく懸りて、染筠の涙いよいよ落つ。泉門一たび閉ずれば、また見むに由しなし。ああ哀しきかも。

黄泉にいたる門とは、当時は塚の門であったであろう。埋葬して門を閉じれば、再び開いて見ることは出来ない。今日にあっては、この門は、火葬場の鉄の扉であると思う。棺を送り、扉を閉じれば、轟々と火の燃える音が聞こえるのみである。

続いて、憶良の七言絶句が書かれている。

愛河の波浪はすでに滅び
苦海の煩惱また結ぶことなし 云々

憶良は、男女の「恋」を歌ったことはない。それは、一つには、憶良の歌が老年になって作られたからであろう。しかし、若い時作ったと思われる歌にも、恋の歌はない。このために、万葉集と言えば恋の歌だ、と思っていた人達の、集中砲火を浴びたことがある。今日では、憶良は「人間の愛」を歌ったのだ、と言われるようになった。筆者は、これをさらに進めて、憶良は、「人間の愛と死」

を歌ったのだと思う。前記漢文に続いて、挽歌と反歌が歌われる。

妹が見し^{アフチ}棟の花は散りぬべし

わが泣く涙いまだ干なくに

神亀5年7月21日筑前国守山上憶良^{グテマツ} 上る

筆者の母が死んだ時は、桜の花が満開であった。涙も乾かぬ間に、桜は散ってしまった。父が、1年しか生きられぬと知った時には、漢文を作るどころか、長恨歌の一句を借りて、紙切れに、玉容寂寞淚闌干と書いて、ただ涙を流すばかりであった。

巻5には、さらに、憶良の名を不滅なものにする反歌が続く：

シロガネモ クガネモ タマモ ナニセムニ マサレルタカラ コニシカメヤモ
銀母 金母玉母 奈余世武余 麻佐礼留多可良 古余斯迦米夜母

シロガネ クガネ マサ
銀も 金も玉も 何せむに 勝れる宝 子にしかめやも

そして、これまた有名な長歌が来る：

ヨノナカ
世間の すべなきものは 年月は 流るごとし 取り続き
追い来るものは 百種^{モモクサ}に 迫^セめ寄り来る 少女^{オトメ}らが 少女さびすと 唐玉^{カラタマ}
手許に巻かし 同輩^{ヨチコ}児らと 手携り^{テタズツワ}て 遊びけん 時の盛りを 留^{トド}みかね
過^{スグ}しやりつれ 蜷^{ミナ}の腸 か黒き髪に 何時の間か 霜の降りけん 紅^{クレナイ}
面^{オモテ}の上に 何処^{イゾク}ゆか しわが来たりし 丈夫^{マスラオ}の 男子^{オトコ}さびすと 剣太刀^{ツルギタチ}
腰^ハに取り佩き 狩弓^{サツユミ}を 手握り持ちて 赤駒^シに 倭文鞍^{ツクラ}うち置き
匍^ハい乗りて 遊びあるきし 世間^{ヨノナカ}や 常にありける 少女^{オトメ}らが
さ寝す板戸^{イタ}を 押し開き い辿^{オド}りよみて 真玉手^{マタマテ}の 玉手さし交え
さ寝し夜の 幾許^{イクダ}もあらねば 手束杖^{テツカヅエ} 腰にたがねて か行けば
人に厭^{イト}わえ かく行けば 人に憎^{ニク}まえ 老男^{オヨシオ}は かくのみならず
たまきわる 命惜^{スベ}しけど せむ術もなし

神亀5年7月21日 嘉摩郡にて撰定
筑前国守山上憶良

全く。「か黒き髪に、何時の間か霜の降りけん。紅の面の上に、何処ゆか、し
わが来たりし」である。そして、「か行けば、人にいとわえ、かく行けば、人に
憎まえ、老男は、かくのみならし」である。老残の身をさらし、「産業廃棄物」と
か、「粗大ゴミ」などと言われようと、「せんすべもなし」なのである。これは、
高齢化社会になった今になって、急に始まったことではない。万葉の昔からあ
ることだ。女性はいざ知らず、男は、「美しく老いる」などと、出来もせぬこと
は考えぬことだ。男にとって、老いとは醜く、哀れなことなのだ。これは、何
も筆者のオリジナルではない。千年以上も昔に、憶良が言っていることである。

§IV-5 語りつぐべき名は立てずして

天平2年(730年)庚午の年、憶良71歳の時、大伴旅人は、一足先に大和に帰着
した。憶良は、老年の別れを淋しく思ったに違いない。これが2人の、最後の
別れとなった。翌天平3年、旅人は亡くなった。憶良も、天平4年(732年)壬申
の年、2年遅れて、73歳で大和に帰り、翌天平5年(733年)癸酉の年、74歳で亡
くなった。

憶良は、斉明、天智、天武、持統、文武、元明、元正、聖武と、8代の治世
を見て来た。大和も見た。平城京も見た。大宰府も見た。大唐の都、長安まで
見て来たのである。その学力と見識に、不足のあろう筈はない。今、その最期
にのぞんで、智情意のすべてを尽くして歌うのである。漢文で書かれた、「沈痾
自哀文」(長煩いして、自分でも哀れだと思ふ文)にはこうある：

初めて痾に沈みしよりこの方、年月やくやく多し。是の時年七十有四、鬢髮
斑白けて、筋力やせおとらう。ただに年老いたるのみにあらず、またこの病
を加えたり。四支動かず、百節皆疼み、身体はなはだ重く、なお鈎石を負え
るが如し。布をかけて立たんと思えば、翼折れたる鳥の如く、杖によりて歩

まんとすれば、足なえたる^{ウサギウマ}驢の如し。

筆者の父が死ぬ53日前には、玄関の6段の階段を、やっとの思いで登った。病院では、スプーンが重いと言って持ち上がらなかった。ベッドを下りて、立上ることなどとても出来ない。この経験から、憶良の病状がどんなものか、実によく判る。

さらに、一篇の漢文の序が続き、一篇の七言絶句が来る：

俗道変化猶撃目
人事經紀如申臂
空与浮雲行大虚
心力共尽無所寄

俗道の変化は撃目のごとく^{グキモク}
人事の經紀は申臂のごとし^{シンビ}
空しく浮雲と大虚を行き
心力共に尽きて寄る所なし

まばたきする間に世間は変わり
ひじを伸ばす間に人は滅びる
雲のように空しく虚空をわたり
考える力も尽きて依り所もない

病床の憶良に、藤原の房前^{フササキ}の第3子、藤原の朝臣^{ヤツカ}八束から、見舞いの使者が来た。

ここに憶良臣、報^{コタエ}の語^{コトバ}すでに畢^{オワ}り、須^{シバラク}ありて涙^{ナミ}を拭い、悲しび嘆きて、此の歌^{ウタ}を口^{クチ}吟う。

オノコヤ モ ムナシカルベキ ヨロズヨ ニ カタリツグベキ ナ ハタテズ シ テ
 士也母 空 應有 万代余 語 続可 名者不立之而

オノコ ヤ も 空しかるべき 万代に 語りつぐべき 名は立てずして

憶良が見た悲嘆と絶望の、さらに彼方の、もっと彼方に、彼の名は「万代」に
 立ったのである。

(1988年7月28日記 完)